

民族建築と観光開発

——中国・西双版纳州における家屋の変容——

Ethnic Architecture and Tourism Development

——Transformation of Architecture in Xishuangbanna, China——

前 田 直 人*

Naoto MAEDA

Abstract

This paper focuses on the transformation of Architecture in Xishuangbanna, China. The tourism development in Xishuangbanna emphasized the protection of the ethnic culture. However, the actual state of preservation in a village was delayed, if not hardly witnessed. In the mean time, a lot of people have rebuilt their houses without government authorization. Recently, the government of Xishuangbanna accelerated its call to protect elements of village culture, such as traditional architecture and fashions. Since this time, the reconstruction of houses has come to be severely criticized. In a tourism area in the village, a number of newly rebuilt houses were demolished. In recent years however, the mode of traditional architecture has shifted from house building to repair and restoration of interiors. This has been made possible by local government subsidies to the people living in the area.

キーワード：西双版纳，観光開発，民族建築，竹楼

1. はじめに

中国の西南部に位置する西双版纳タイ族自治州が、今日著名な観光地として認識されているのは「緑の宝石」とも称される熱帯雨林等の自然資源や、タイ族を中心とした数多くの少数民族が居住していることに由来している。そのほかにも、プーアル茶の産地として古くから知られ、また近年では西双版纳に居住する少数民族の経済発展に大きく貢献してきたゴム園でさえも観光地としてひらかれるようになってきた。この中でも、多くの観光客が期待を寄せるのは

* 名古屋大学大学院国際開発研究科博士後期課程，本学非常勤講師，観光人類学 (Anthropology of Tourism)

豊富な熱帯雨林や少数民族の「原風景」であり、おおむね二泊や三泊といった短期滞在型の観光客は、急ぎ足で熱帯雨林を散策できる観光地や、民族文化を体験することのできる観光地・村落を訪ねてまわるのである。

民族文化をテーマにする観光地の場合、公園型と村落開放型とに大別することができ、公園型であれば園内に当地の少数民族が居住する民族建築をモデルハウスとして設営し、内部には生活用具のほか、儀礼や祭りの写真等が掲載されている。何かわからないことがあれば、館内に常駐している少数民族の解説員に尋ねればよいし、中国の祝日である国慶節など大型休暇と重なっている場合は、現地の少数民族の若者たちによる結婚儀礼や歌垣といったイベントにも参加することができるだろう。一方、村落開放型は文字通り一般の少数民族村落を観光客に開放し、少数民族の伝統的な食事や舞踊を楽しむことができるほか、場所によっては宿泊ができるところもある。宿泊にせよ食事にせよ、街の中心部にあるホテルよりははるかに安価で、かつ少数民族の生活を生で体験することができるという点から人気が高まった。ただし、滞在期間の短いパッケージツアーでは舞踊の見学や食事といった目的で訪ねることが多く、宿泊は個人客による利用がほとんどである。

観光客に向けて開かれた村落では、ただ自分たちの暮らしぶりをそのまま見せるのではない。そこでも公園型の場合と同様、観光地という性格のためにさまざまな文化の呈示がなされる。観光地経営者や西双版纳の政府、観光局は西双版纳を訪れる観光客に向けて魅力的な文化を呈示しようと試みるが、観光地化した村落においてもそれは同じようにあてはまる。公園型の観光地のみならず、少数民族村落においても同様に、観光用につくられた文化が創造されるのである。ただし、観光文化は観光客を意識して呈示されたものであるがゆえに、時として観光客を受け入れるホスト側が拒否反応を示す場合もあるだろう。またその逆に、つくられた観光文化に対する観光客側の拒絶反応など、常に文化をめぐるジレンマが存在する。しかし、本論で考えたいのはとりわけ村落開放型の観光地を中心に、政府や観光局が何を資源とみなし、呈示すべき文化として重要視したのか、そしてこれに対する村落住民がどのように対応したのかという点にある。その中心がここでは民族建築、つまりタイ族を中心とした西双版纳の少数民族が長期にわたって継承してきたとされる竹楼¹⁾なのである。

本論ではこの少数民族の文化としての竹楼の変容と観光のかかわり合い、そして村落住民の対応について検討する。以下ではまず、急速な発展を遂げる西双版纳において民族建築も次第にその姿を変えつつある現状を踏まえ、政府や観光地運営者がこれをどのように観光資源として運用しようとしたのか、そしてこれに対する村落住民の対応について考察したい。

2. 村落観光の展開とその背景

西双版纳の竹楼と村落型観光地に言及する前に、まず西双版纳が属する雲南省とその観光政

策についても簡単に触れておきたい。中国の西南部に位置する雲南省は、1980年代よりはじまる改革開放政策に後押しされる形で急速に観光業を発達させてきた。ミャンマーやラオス、ベトナムと国境を隔てており、豊富な自然資源に恵まれているほか、多数の少数民族が居住していることなど、観光資源という見地からは絶好の土地であった。ただし、雲南省の観光をめぐる発展方針は省ごとの駆け引きや、省内の観光地間における潜在的な観光客の獲得をめぐる開発競争、そして中央政府の政策とも連動している²⁾。たとえば国家旅遊局は、毎年ごとにテーマを設け観光促進活動を進めているが、2006年度は「中国郷村遊」であった。これは中国国内での東部と西部の所得格差の拡大や、これにともなう三農問題（農業、農家、農民）への取り組みが根底にある。中国郷村遊、つまり農村観光の促進は中国の農村地区が抱える問題を解決するための方策として掲げられているという側面があり、西双版纳の村落観光もこうした一連の観光政策と無縁ではない。

このように、中国における村落観光が近年脚光を浴びるようになったとはいえ、村落観光そのものはここ数年に立ち起こったわけではなく、むしろ民族村などの公園型観光地とともに併存する形で建設されてきたという経緯がある。1980年代の改革開放政策以降の民族観光をはじめとする観光業の復興は、文革以降徹底的に破壊された文化への反発、グローバリゼーションにともなう文化の単一化に対する民族意識の高まりなどを受けたものだった（徐万邦、祁慶富：1996）。こうした背景のもと、1986年に貴州省において中国で最初の村落開放型の民族文化村が、貴州省の文化庁による出資と北京の中央民族大学の大学院生の協力によって建設されている³⁾。ここではミャオ族やトン族の村落が対象になり、観光客の受け入れと民族舞踊の公演が行われるようになっていく。また、公演型のテーマパークとして、深圳の民族文化村や北京の中華民族園のほか、雲南省の省都・昆明でも雲南に居住する26の少数民族を一同に集め、モデルハウスと生活用具の展示、舞踊の公演を中心とした雲南民族村が開園した。

一方、西双版纳の民族観光は公園型観光地を中心に1980年代より開発が進展していったが、その経営母体には中国沿岸部の企業や、漢族を中心とした国営農場が参画している点が重要である。たとえば、1987年に開園した西双版纳州民族風情園は、解放間もない1958年に設立された国営農場がその基盤となっており、当初は植物栽培を主とする研究機関という位置づけであった（村上他：1997）。また、浙江省の金洲集団は1980年代後半から現地への投資を開始し、熱帯雨林や民族文化を主題とした「原始森林公園」やタイ族村落を整備・観光化した「勐景来」などを開園している⁴⁾。村落観光の分野では、国営農場とタイ族村落が共同出資する形で五つの村落を観光地化した「傣族園」が開園し、「企業＋農家型」の観光地として中国全土で大きな話題を呼んだ。村落内では寺院や小学校といった日常的な公共施設のほか、観光客に見せるための舞踊の場所として、村の中心部に巨大な舞台が建設されている。また、観光客は一泊二十円でタイ族の家屋に宿泊することができ、国慶節などの大型休暇の時期になるとすべての村落が観光客で埋まるという。

しかし、西双版纳の観光地は公園型、村落開放型のいずれにせよ一時は乱立傾向にあったために、数年のうちに閉園してしまった観光地も少なくない。たとえば西双版纳の州都・景洪の南部に建設された「版纳楽園」は西双版纳の少数民族の展覧館や舞踊の公演、レストラン、宿泊施設などおよそ西双版纳のあらゆる観光資源を詰め込んだテーマパークとして、中国東北部の個人投資家が経営を開始したが、数年のうちに閉園している。また、一般村落が観光局の紹介で観光客の受け入れをはじめた事例もあるが、その前途は決して明るいものではない（村上、橋谷他：2002）。その原因のひとつとして、前述したように観光客の滞在日数の少なさや、他の観光地との差異の確立が困難になっているという理由がある。わずかな日数で西双版纳の魅力を堪能するために、観光客は一日あたり二、三件の観光地をまわることになるが、そうであれば観光地のテーマがある程度の幅をもつことは重要である。したがって、小さな村落よりも西双版纳の文化や自然が凝集された比較的規模の大きな観光地が選択されざるをえない。

また、これと関連して観光資源の多様さが観光地の建設をより難しいものになっている場合がある。たとえば同じ雲南省でもペー族が大半を占める大理や、ナシ族を主体とする麗江などと比較すると西双版纳の観光資源はきわめて幅が広がっている。民族構成からみてもタイ族を中心に、ハニ族、プーラン族やジノー族など複雑な多民族社会を形成しているほか、熱帯雨林をはじめとする自然資源もきわめて豊富だが、観光地建設の過程で開発者は多様な資源を一手に囲い込もうとする傾向があり、観光地間の競争激化ともあいまって、淘汰が引き起こされているのである。また、近年ではこうした西双版纳内の観光地間競争に加え、同じ雲南省の他観光都市や、近接するラオスやタイ、カンボジアといった東南アジア諸国家とのあいだにも競争関係が認識されるようになってきている。西双版纳政府内では、西双版纳の観光業がより魅力的な資源を打ち出せなければますます厳しい状況に陥ることになるという指摘もなされており、さらなる文化の保護と発掘の必要性がさげばれている（黄映玲：2004）。ここにおいて、少数民族文化の根幹をなすものとして、伝統的な建築物としての竹楼保護が観光業にとって重要であることが確認された。しかし、竹楼の現状はすでに大きな変容の途上にあったのである。

3. 近代化と竹楼の変容

西双版纳に居住している少数民族のうち、古くから竹楼に居住していたのはタイ族を中心に、ハニ族、プーラン族がいる。ここでいう竹楼とは、正式には「干欄式竹楼」ともよばれるもので、タイ族の源流である百越族の言語で「部屋」を意味している（高芸：2003）。建材には主に竹と木が用いられており、屋根を草で葺いた二階建ての家屋である。二階は調理場、寝室、応接間が設けられ、外側に張り出した竹組のバルコニーでは食材の洗浄、衣服の洗濯といった用途に使われており、生活の中心に位置づけられる。一方、階下では牛や豚、鶏を放しているほか、穀物の貯蔵庫が設営されていることもある。側面の壁には竹材が用いられている

ため、亜熱帯に属する西双版纳の高温多湿に適し、冬でもいろいろの熱が室内の温度を適度に保っている。解放直後に中国科学院と雲南歴史研究所によって行われた調査でも、こうした竹楼の様相が記されており（中国科学院民族研究所雲南民族調査組、雲南省歴史研究所民族研究室編：1964）、長期にわたって生活の根幹を成していたことがわかる。

しかし、解放後の竹楼はいくらかの段階を経て、次第にその外観を変えていった。最初の段階として、屋根が瓦葺きに変わり、竹楼の側壁と天板は竹材から木材へ移行し、竹楼に占める竹材の使用は減少している。その次の段階として、竹楼を支える支柱が煉瓦化し、竹楼を取り囲む外壁が煉瓦で覆われるようになった。また、竹楼そのものを取り壊し、コンクリートを用いた漢族風の、いわゆる「楼房⁵⁾」へと完全な建て直しをおこなう地域も現れている。外壁の竹材から木材への移行は、生活のありかたそのものを大きく変えるにはいたっていないが、コンクリートや煉瓦を用いた家屋の楼房化は、生活と村落の外観を大きく変える発端となった。もっとも、すべての村落がこうした傾向を踏襲しているわけではないが、いったんある村落で建て替えが起これば、その村落はこれに追従する傾向をもっている。煉瓦造りの楼房は、竹楼と比較しても通気性が悪く、言うまでもなくいろいろの相性が非常に悪いために、窓枠がつけられていても室内の気温調整がきわめて困難になっている⁶⁾。

生活環境が一見して悪化しているように見えながらも、楼房への建て替えが各村落で行われていることの理由に、経済的なゆとりが生まれた結果の、ひとつの帰結とみることができる。たとえば、筆者が継続して訪問している山間部のプーラン族村落では、ひとつの家庭が家計の余剰分の積み立てを家の建て替えに振り向けた結果、周辺住民がこれを模倣し始めることで楼房化が急速に進展した⁷⁾。楼房化しても二階部分に居住することはおおむね変わらないが、コンクリートや煉瓦をはじめとして、タイルの使用や、太陽熱給湯システムといった近代的な設備が整いつつある。筆者の聞き取りによれば、竹楼に変わらず住み続けている村民のことを「まだ家すら建てることができないほど貧しいのだ」と指摘する声が多く聞かれた。楼房への改築を近代化の象徴とみなし、これを模倣するという現象はひとつの説明として考えられる。

また、解放以後急増した漢族移民の影響も看過することのできない問題である。前述した国营農場も、1950年代に内陸から南下した漢族移民によって建設されたものだが、当時は国防衛や医師、科学技術員などさまざまな役割と目的をもった組織的な移住がなされていた。もっとも、解放前の1940年代にはすでに民国政府陸軍が駐屯し、いくらかは現地で婚姻関係を結び定住する場合もあったが、建国と解放を経て推し進められた組織的な漢族移住は西双版纳の「中国化」をより顕著なものにしたといつてよい（前田：2003）。その後、1960年代以降は下放政策の影響下で進められた知識青年の流入、1990年代から活況を呈する国境貿易や観光開発など、経済活動の活発化による漢族の移住が常態化する。近年の移住との比較において、とりわけ顕著なのは以前のような組織的な移住ではなく、むしろ活発な経済活動の恩恵を求めて自発的にやってきた移民の群れという点にあり、これらの移住者たちは特定の集落を形

成するよりも、少数民族村落との混住を促進する結果を生み出していった（長谷川：2003，管野：1995，1998）。今日でも、少数民族村落の一部では散見されるが、外来の移住者に対してタイ族は竹樓の床下にあたる一階部分に小部屋を設け、これを賃貸という形で移住者に住まわせていた。

州都の景洪市の一角にある曼景蘭とよばれる村落一帯では、こうした傾向が顕著にみられる。観光開発の潮流が押し寄せる中で、タイ族住民が自民族の料理を観光客に提供する、いわばエスニック・レストランを開店した事例はその典型であるが、これによって得られた資金は、さらなる賃貸の拡大や樓房への改築へ運用したり、またはレストランそのものの経営権を移住者に譲渡した。その結果、曼景蘭一帯は樓房への改築が加速し、タイ族と漢族を中心とする移住者にとって有用であるような、生活の利便性を向上させる目的へと向かい、床屋や売店、薬局、ネットカフェ等が軒を連ねるようになった。現在ではラフ族の舞踊ショーを催しているレストランと、バックパッカーなど海外旅行者向けのカフェが数件立ち並ぶ以外は観光客を引き寄せる要素を失っている。西双版纳域内の観光開発が活況を呈する1990年代には、この一帯をタイ族料理が味わえるレストラン街（風味一条街）にしようとする意見も出されていたが（李長鳳：1995）、最終的に西双版纳政府の管理が継続することはなかった。

こうした竹樓から木樓へ、そして漢族の影響を受けた樓房化を経ることで村落の容貌は大きく変容していった。1990年代の観光開発ブームは外地からの投資を促進させ、観光地は数量的な充実がはかられたことで雇用が拡大し、生活の向上がもたらされたが、一方で村落そのものの様態は見過ごされてきたといえる。もっとも、たとえば保繼剛は早くから西双版纳の民族文化が観光開発によって取り壊されつつある現状を指摘していたが、現実には優先されたのは、村落の容貌よりも観光客にとっての利便性であった（保繼剛：1996）⁸⁾。

4. 竹樓の再設計と観光化

このような竹樓の現状を踏まえ、今後の西双版纳における観光開発の発展を考える上で、竹樓は重要な保護対象として考えられるようになった。2000年以降の、雲南省の観光都市間における観光客の獲得競争が激化し、西双版纳の観光業の没落が意識されはじめたことが直接の契機となり、政府内で観光ブランドの育成に向けた方針が確認されたが、竹樓の保護についてもこの場で提起されている。特に着目すべき点は、既存の観光地を問題視するのではなく、西双版纳域内に広く点在する村落の変容について具体的な言及がなされたことにある。2004年7月に開催された「西双版纳村落文化專題座談会」の報告として、村落文化の保護は三つの挑戦に直面していると指摘された。第一に、一部の少数民族は自らの民族文化を保護しようとはせず、漢化・西洋化⁹⁾しており、これが民族文化の流出の主要な原因になっている。そして、第二に短期的な経済利益を追求し、民族の生態文化を軽視したために自然資源が流出している

ということ、最後に政府が周到な民族文化保護のための政策法規を有していないとする点である（黄臻：2004）。また、こうした原因によって民族村落の建築の多くは異化し、村落文化が持続的に発展していくための根本的な資源を喪失してしまったと言い切っている。

ただし、後述する村落型観光地における竹楼保護の取り組みとも関わるが、政府は竹楼のすべてに対し、永続的な保護を試みようとしているわけではない。というのも、民族文化とならび重要な観光資源である熱帯雨林などの自然資源の保護も重要な観光政策のひとつとして考えられており、西双版纳の多くの地域で狩猟や焼畑、森林の伐採を禁じる保護区が拡大し、西双版纳域内では竹楼の建て替えに相応しい建材の入手が困難になりつつある。また、国家による森林保護の強化と、これにともなう木材価格の高騰も少なからず西双版纳の建築事情に影響を及ぼしている（楊宇明・尹仲文：2005）。問題は、竹楼を中心とする村落文化が持続して発展してゆくために、少数民族村落における建て替え需要に対してどのように対応するべきか、その際に楼房化を回避しながらいかに従来の民族建築を保持し続けるかという点にある（黄臻：2004）¹⁰⁾。ただし、それ以前に政府主導による新しい建材を用いた次世代のタイ族建築を設計しようとする動きが、すでに1990年代の時点で行われていた。

2004年12月の『西双版纳報』¹¹⁾によれば、西双版纳政府は1990年代後半に、文化遺産としての伝統家屋の保護を重視し、保護政策の策定とこれに関連する機関を成立させ、民族建築のモデル村の制定に向けて動き出している。また、1997年3月には雲南工業大学建築工程学院と西双版纳建設局の協力により「伝統的なタイ族建築の現代小康住宅¹²⁾」への移行に関する実験研究が雲南応用基礎研究基金と国家自然科学基金の支援を得て取り組まれた。この課題の目的は、タイ族群衆のために新しい民居を設計し、伝統民居の特徴を保持しつつ群衆の生活習慣に適合させながらも、同時に現代人の要求を満たすことのほか、住宅環境の質の向上と、新しい建築によって産業を発展させることで農村経済の全面的な発展を促進させることにあった。新しい家屋はより幅広い機能を備えたものとして設計され、階下には貯蔵室が設営されたほか、二階部分には客間や厨房、洗面所が設けられている。また、設計にはユーゴスラビアの建築技術が採用され、家屋を支える梁や柱、板には高強度の鉄筋とコンクリートが使われ、耐震や防火面の強化がはかられた。屋根部分に関しては木材のほかに鉄筋があわせて使われている。この新しく設計された家屋は、竹を主な建材とする「第一世代」、木材を主とする「第二世代」となり「第三世代」の新式民居と呼ばれている。

ただし、異化した建築として指摘された楼房への改築も、コンクリートが主要な材料になっていることからわかるように、鉄筋やコンクリートを用いた「第三世代」の新式民居との比較からいえば、建材の点では両者の差異が明確にはなっていない。むしろ、ここで重視されたのは建材よりも楼房への建て替えによって失われた空間構造にあった。楼房化が引き起こした空間構造の変容とは、コンクリートによって小分けされた部屋や階下部分の消失であり、竹楼の特徴となる重要な要素、つまり柱によって支えられた居住部と、家畜や倉庫としての役割を

果たす階下の空間、そして家屋の頂上部から翼状に広がる屋根といったものであった。新しく設計された家屋は、コンクリートを主要な建材として用いつつも、竹楼の空間構造を継承したのである。しかしながら、近代化の過程における建て替え需要と伝統文化の保持の両者を下支えたのは、あくまでも農村経済の発展を企図していたからに他ならない。言い換えれば、伝統文化の保護も、新しく設計された家屋も、観光産業への布石として打ち出されたものなのである。そして、この家屋は実際に州都の景洪市郊外に位置する曼弄楓、曼景法、曼弄広村などで採用された。

たとえば39戸のタイ族村落でなる曼景法村では、2004年10月から木材で構成される第二世代の家屋から第三世代の新しい民居への建て替えが行われた。2006年、中国の旧正月である春節期間には300人の観光客を受け入れ、好評を博したという¹³⁾。また、曼弄養村でも早くから第三世代の民居へ建て替えを進め、観光客の受け入れを開始している¹⁴⁾。曼景法や曼弄養といった景洪市郊外の村落では、穏やかな改築の受け入れが進行していったが、この一帯は改築の受け入れ前から米や野菜、ゴム園など豊富な経済作物を有していたため、経済的にはすでに「小康」の状態に達しており、それゆえ楼房化への変転は用意に予測できたであろう。また、当時の村落一帯は西双版纳第二期リゾート開発区の範囲にはいていたことから、村落が観光開発に積極的に乗り出したという側面があり、すでに周辺村落を巻き込んだ組織的な観光開発へと進展しつつある¹⁵⁾。以上の事例は、村落が政府の後押しを受けた形で家屋の改築と観光への取り組みがなされていったが、一方で企業と村落が提携した村落開放型の観光地では、家屋の改築をめぐるいくらかの抵抗が起こっていた。次にこの事例を取り上げてみたい。

5. 竹楼の改築と増築をめぐる

西双版纳における村落開放型の観光地は年々数を増しているが、なかでも五つの村落を観光化した傣族園はもっとも成功した事例として脚光を浴びている。はじめに述べたように、傣族園は「企業＋農家」モデルを喧伝する、村民と農場の共同出資によって成立した観光地で、1999年に正式に開園した。経営母体である「傣族園有限公司」の運営は国营農場の人間が中心になっており、村民は観光地内で催される舞踊や土産物の展示・販売にあたっているが¹⁶⁾、実際はほとんどの家庭で観光客の受け入れを行っているため、ほぼすべての村民が何らかの形で観光業に関与していると言ってよい。また、村落の観光化はこれまでの主要な収入源であった農作物やゴム園に加え、観光客の宿泊や食事、公司からの給与が支払われている。

これまで取り上げた事例と同様、村落の観光化による経済面のゆとりは家屋の改築を目指す動きへ向かうが、実際にはその外観や竹楼の様式が大きく変容することはなく、そのかわり内装の改修や著しい家電製品の充実が起こった。孫九霞はこうした傣族園の様相を都市化の問題として論じているが、このような内部の改修は都市化の風格を追求しており、とりわけ若年層

はクーラーや高級家電製品といった豪華さを求めているにも関わらず、竹楼そのものの脱却へと向かわないのは、観光の発展のために村民が理知的に選択した結果であると指摘している(孫九霞:2005a)。一般的に、農村の都市化は農業からの離脱を招き、コミュニティの崩壊をもたらすと指摘されるが、傣族園では生業に占める農業労働の割合が減少しているものの、完全な非農化もコミュニティの崩壊も起こらなかった事例である。

しかし、傣族園においても竹楼を改築し楼房化を目指す動きは起こっていた。傣族園の総経理を務める範文武が寄せた論考によれば、園内のある村落内で観光スポットの建設が予定されていた場所に、村民が「洋楼(楼房)」を建てようとした。管理局は工事停止通知書により建設の差し止めを求めたが、地主は「自分の金をどのように使おうと自由だ、建てたいから建てるのだ」と制止と反対の声を振り切り、三階建ての「洋楼」を建て上げたと明かしている(範文武:2004)。その後、傣族園はこうした楼房への改築を未然に防止するため、いくつかの対策を講じた。はじめに、園内の異化した建築の取り壊しを行い、土地を買い上げるとともに補償金制度を導入している¹⁷⁾。次に、2004年に「傣族園村民の干欄式建築家屋の補償案について」を打ち出し、異化していない干欄式建築には経済的な補償を与えることを決定した。また、2003年に傣族園が提起した「傣族の干欄式建築保護の立法化に関する建議」が雲南省の人民大会で集められた立法建議案において大きな注目を集めている。

こうした傣族園側からの保護政策は一定の効果を上げることに成功し、楼房化を目指す動きは現在のところ現れていない。一時は楼房化への動きがあったにも関わらず、現在はむしろ現有の家屋を保持しようとしているのは、範文武が述べたような補償金制度や法整備の充実以外にもいくつかの理由が存在する。そのひとつが、観光化による経済的な成功である。傣族園の開園以降、改築の動きのほかにも民族文化の観光化に対する反発が少なからず起こっていた。たとえば傣族園の売り物のひとつに、一年をとおして毎日のように100人のタイ族女性からなる舞踊を披露し、タイ族の新年を祝う「潑水節(水掛け祭り)」を観光イベントとして披露するというものがある。このイベントは農場側から提案されたものだが、当初は村民の誰もがこのイベントに対して懐疑的であった。ある村の人間は「最初、総経理が百人のタイ族女性による舞踊を披露し、毎日水掛け祭りをやるといったとき、村民の誰もが納得しなかった。何が面白いのか…」と。しかし、これがいまでは傣族園の名物になっている。彼(総経理)は将来を見通すまなざしをもっているのだ。それから村民の誰もが総経理の方針に従うようになった」と話している¹⁸⁾。このような傣族園の経済的な成功から、楼房化への改築を求める声はなくなり、現在は竹楼の保持を越えて、内装面からより観光に相応しい増築の方向へと進んだ。つまり、観光客が宿泊するための小部屋の拡張や洗面所の充実などがその内容である。

ただし、タイ族村落の住民は経済的な成功のみを求めて観光化を受け入れてはいない。たとえば、竹楼の楼房化において論じたように、自然保護区の拡大により、伝統的な家屋の保持・改修に必要な建材を西双版纳域内に求めることは多くの地域で困難になりつつある。現在、一

件の家屋を新築に近い状態で建て直そうとすれば、建材はミャンマーなど近隣諸外国に頼らざるを得ず、およそ三十万元もの資金が必要になっている。楼房であれば、コンクリートは自前で精製できるうえに安価なことから、その三分の一にあたる十万元で建て替えが可能である。山間部の少数民族村落では生活にゆとりをもつことができた家庭から楼房化がはじまり、周辺がこれを順次模倣していったが、傣族園の場合はゴム園や観光化で得た資金を、より多くの観光客を獲得するための家屋の保持と容積拡大へ向かったという違いがある。ただし、一見して家屋の保持と拡張が順調に進んでいるように見えても、村民のすべてが傣族園の開発の現状を必ずしも好意的にみているわけではない。ある村民は「いまの傣族園の開発の状況はよくない。傣族園はただの公園になりさがってしまったからだ。傣族生態園などに名前を変えたほうがよかった。わたしたちはこんなに自然と共生しているというのに」という¹⁹⁾。このことは、家屋の保持に対する十分な評価が得られていないことを意味している。傣族園における竹樓の保持や拡張も、政府による村落文化の保護と振興も、前提としては西双版纳の民族文化が西双版纳にとってだけでなく、中華民族や全人類にとって貴重な財産であり、科学的にも価値があるという考え方が根本にあるが、孫九霞が指摘しているように「外部者が過去の異境や異民族を寵愛し、伝統の変更不可能性を堅持することをしばしば提案しても、それが村民の思うところと合致するとは限らない（孫九霞：2005b）」のである。

6. おわりに

竹樓は西双版纳に居住する多くの少数民族が継承してきた伝統文化ではあるが、村落文化や観光文化としてしばしば外部者から制度化され、呈示されるようになった。外部者とは、本論で列挙してきたように漢族をはじめとする移住者や、彼らによって建設された国営農場、そして外来の企業であり、外地から出向してきた政府の役人なども含まれる。西双版纳の観光開発で公園型観光地が隆盛を極めた時期は、周辺村落側からみれば雇用が拡大したことになり、村落そのものの保護政策とは無縁であった。少数民族の観光地従事者は、自身が当該の民族出自であればよく、従事初期の職業訓練を経れば低学歴であっても、ある程度の収入を見込むことができた。もちろん、竹樓の楼房化は多くの地域で着々と進行していたが、表立った形でこれが批判されることはなかったのである。ところが、竹樓の保護や産業との連携を企図した村落文化の確立に向けた動きは、村落の経済発展と、観光客の需要を満たすための家屋をはじめとする民族文化の保護が同時に要求された。これを保証したのは政府が主張する「保護こそ発展である」という図式であり、観光開発の発展と経済的な恩恵である。つまり、伝統家屋としての竹樓の保護は、観光文化の介入とささえいえるような他者からの規定によってもたらされた側面が垣間みられるのである。孫九霞の指摘通り、それは村民の思惑と合致しているとは限らないが、同時に文化の保持を求める声に対する否定も容易ではないだろう。本論では竹樓の変容

と観光化，そしてこれに対する村民の反応をみてきたが，村民自身の家屋の保護に対する態度の細部までは踏み込んでいない．今後の課題は，観光研究の原点ともいえる，受け入れる村民側と観光客のあいだの「民族文化」をめぐる対話の考察である．

注

- 1) 竹楼は中国語で「竹楼」，「民居」といった語彙が用いられる．「竹楼」という語彙は漢族側からの呼称であるが，観光地で一般的に用いられており，保護の文脈においても広く流用されていることから，本文中では主に「竹楼」を用いる．
- 2) 雲南省における観光政策の詳細については松村（2001）を参照．
- 3) 1986年の開園を前後して，1987年と1988年に中央民族大学に在籍する民族学系の院生たちによって調査・文物収集が行われ，その成果として「民族節日文化展覧」を挙行している．その後，博物館の建設とともに，三つの民族村にて観光客の接待と公演を開始した．観光地における文化の呈示に政府系機関のみならず，このような研究機関も関与していることは注目に値する．
- 4) なお，金洲集団は現在「金孔雀集団」と改称し，金洲集団とは分社化する形で土着化した．ただし，金孔雀集団の責任者は浙江省から派遣された人物が勤めており，観光地の文化呈示から経営までの一切を指揮し，一定の影響力を保持している．
- 5) 楼房（Lou2fang2）とは二階建てかそれ以上の建物，ビルを意味する．少数民族出自の人々がコンクリートと煉瓦による建て替えをおこなうとき，これを「楼房」と呼んでいる．また，まれに一階建ての平屋へ建て替える場合もあるが，この場合は「平房（Ping2fang2）」といい，近年いくらかの少数民族村落でも見かけるようになっている．
- 6) 本論では触れないが，屋根瓦には近年「石綿瓦」が頻繁に用いられるようになっている．周知の通り，石綿は有害物質であるアスベストを含み，日本はもちろんのこと，世界中で使用が禁止されるようになっているが，西双版纳ではむしろ石綿瓦が建て替えの際に広く流用されている．
- 7) より具体的には，山間部の少数民族が低地のタイ族の楼房化を模倣したというべきであろう．事実，西双版纳では古くから低地のタイ族と山間部のそのほかの少数民族のあいだに交易関係が存在しており，タイ族の穀物類が山間部の茶や山菜などと取り交わされていた．こうした民族間関係は西双版纳の各地にみられるが，改築の事例でも山間部の少数民族が竹楼からの建て替えをおこなう場合，低地のタイ族が支援することが多く，ここでもタイ族の改築経験者が現場でコンクリートの生成から骨組みをはじめとする基礎工事にいたるまで一貫して指導しており，両者の関係がこのような場合でも緊密に連携していることがわかる．
- 8) 近年でもこうした傾向は大きく変わっていない．2000年より本格化した西部大開発の影響を受けて，雲南省では交通網の整備が急速に進められているが，北京オリンピックが開かれる2008年までに雲南省の省都・昆明からタイのバンコクまで繋がる高速道路を開通させる予定がある．昆明から西双版纳までの区間は2006年に開通し，現在はメコン川（中国側は「瀾滄江」と呼んでいる）を沿いながらラオスへ通じるルートの建設が進められており，環境保護には最大限の注意を払うとしながらも，メコン川には次々と橋桁が打ち込まれている．
- 9) 上述したように，現地の少数民族が竹楼を改築して楼房を選択するとき，一般的に少数民族側からは「漢族的な」あるいは「漢化した」というように，常に漢族が意識されているが，漢族側からは「漢化」という語句のほか，「洋化」という言葉も用いられる．
- 10) 竹楼の保護はもちろんだが，その施策の多くは村落文化を発展させるとしながらも，その内実は産業化への進展が中心になっている．たとえば，村内の工芸師や芸術家を表彰することで文化の伝承を促すことや，一村一品運動の展開など村落文化産業と観光業の結合が目指すべき目標として掲げられている．中国では国内向け観光が活発化した1990年代に「文化搭台，経済唱戲（文化という舞台で

経済を上演する)」という宣伝口号（スローガン）が唱えられたが、西双版纳の村落文化をめぐる施策もこれと軌を一にしている。

- 11) 「傣家竹楼の变迁」『西双版纳報』2004.12.17
- 12) 「小康」とは「いくらかゆとりのある」という意味で、衣食が何とか充足できるという状態から、生活の向上を経て衣食が充足された社会を指す。2002年の胡錦濤政権誕生以来、この「小康社会」の達成が重要な政策目標として掲げられるようになった。
- 13) 「曼景法“農家楽”接待受遊客青睐」『西双版纳旅遊網 (<http://www.xsbnly.com/>)』2006.02.05
- 14) 「傣族寻找發展新亮点」『雲南日報電子版 (<http://www.yndairy.com>)』2003.02.13
- 15) 「对曼弄楓村落文化保護与開發思考」『勐巴拉娜西生態網 (<http://www.12bn.cn>)』2005.04.10
- 16) もちろん、公司には農場側の人間と村落の住民で多くを占めてはいるものの、他地域のタイ族村落から踊り子として出稼ぎに来ている女性たちが数多く従事しているほか、ハニ族などの少数民族出自をもつ人々も雇用されている。
- 17) この取り壊しと補償金制度は、浙江省の金洲集団が土着化した金孔雀集団の投資による村落開放型の観光地、勐景来においても導入され、投資を行うとともに楼房化した家屋はすべて取り壊し、土地の買い上げと同時に住民に補償金を支払っている。
- 18) 筆者の聞き取りによる (MT 村村長 YH 氏, 06.02.12)
- 19) 筆者の聞き取りによる (MT 村村長 YH 氏, 05.08.30)。

参考文献

日本語文献

- 長谷川清 (2003) 「フロンティアにおける人口流動と民族間関係——雲南省、西双版纳タイ族自治州の事例」『民族の移動と文化の動態——中国周縁地域の歴史と現在』塚田誠之編 風響社
- 菅野博貢 (1995) 「中国・西双版纳タイ族自治州への漢族移住とその社会的影響」『アジア経済』36 (4)
- (1998) 「人口流動化による民族混住」『アジア経済』39 (4)
- 前田直人 (2001) 「西双版纳傣族自治州における文化表象の交錯——民族であるための方法について」『国際開発フォーラム』24
- 松村嘉久 (2001) 「中国雲南省の観光をめぐる動態と戦略」『東アジア研究』第32号
- 村上勝彦、橋谷弘他 (1997) 「中国雲南における観光開発と環境問題——1996年度調査報告 (1)」『東京経大学誌』第205号
- (2002) 「中国雲南における環境行政と観光開発——1998年度調査報告」『東京経大学誌』第231号

中国語文献

- 範文武 (2005) 「傣家村落的文化的保護与開發的意見和建議」『勐巴拉娜西生態網 (<http://www.12bn.cn>)』2005.05.08
- 高芸 (2003) 『中国雲南の傣族民居』北京大学出版社
- 保繼剛 (1996) 『旅遊開發研究 - 原理・方法・实践 (第二版)』科学出版社
- 黄臻 (2004) 「西双版纳村落文化保護与開發的探討」『西双版纳報』2004.07.01
- 黄映玲 (2004) 「用美好的形象吸引人 着力打造“西双版纳—勐巴拉娜西”品牌」『版纳』第二期《版纳》雜誌社
- 李長鳳 (1995) 「西双版纳旅遊發展之我見」『版纳社科』1995 (2)
- 孫九霞 (2005a) 「旅遊發展与傣族園社区的鄉村都市化」『人類生存与生態環境』黑竜江出版社
- (2005b) 「旅遊發展对西双版纳少数民族傳統文化保護的正效应」『西双版纳報』2005.12.26
- 徐万邦、祁慶富 (1996) 『中国少数民族文化通論』中央民族大学出版社

- 楊宇明，尹仲文（2005）「保護和開發特色旅遊資源是西双版纳旅遊可持續發展關鍵——功夫下在旅遊之外」『西双版纳報』2005.12.28
- 中国科学院民族研究所雲南民族調查組，雲南省歷史研究所民族研究室編（1964）『雲南省傣族歷史調查材料——西双版纳地区（九）』